

博士論文審査報告

友池梨紗

「恋愛コミュニケーションプロセスに関する日本の研究」

-現代の日本人男女はどのようにして交際相手と出会い、
「付き合う関係」を構築するのか-

【研究の背景】

現代日本の少子化、晩婚化、また「若者の恋愛ばなれ」が深刻な社会問題と議論される中、心理学や社会学などではある程度研究が進んでいるものの、恋愛という人間関係の状況(コンテキスト)でのコミュニケーションに関わる体系的な研究はこれまでほとんど行われていない。体系的な研究結果に立脚したものではないが、実践的な「男性にもてる話し方」といった、コミュニケーションを、好きな相手との関係を恋愛関係に導き、維持、発展させるための「道具」、あるいは「コツ」としてとらえた話題は週刊誌やインターネットなどのメディアでは盛んに取りざたされていえる。

言語や非言語を媒体とするコミュニケーションが恋愛関係を始めたり、発展させたりするうえで重要な役割を果たすことは否定しないが、コミュニケーション学の領域では恋愛、友情や信頼といった関係、またその結果形成される家庭や会社などの組織、さらには社会生活を構成する規範や制度などもコミュニケーションの一側面、そして「産物」ととらえている。恋愛をするからコミュニケーションという考え方に代わり、あるいは加えてコミュニケーションをするから恋愛、という論理の順番が成立するのである。この前提に立つと、女性と男性との恋愛関係、さらにはその結果の一部である結婚という人間関係は子孫繁栄や自己成長の過程の一部であるので、文化や時代にかかわらず世界共通の経路をたどるとも考えられなくはないが、コミュニケーションの「産物」だとするならば、それぞれの文化の影響を色濃く反映するとも考えられる。

また、携帯電話、インターネット、SNS などといった通信機器や技術の急速な進歩、普及が恋愛の過程での人間関係に与える影響も決して無視、軽視することはできない。さらには、見合いという社会通念と実践が日本の結婚の主流だった時代と比べて、恋愛結婚が一般的となった現代では、男女が出会い、恋愛関係を始め、それを進めたり、高めたりする過程は決して数十年前と同じではあり得ない。「出会いがないから」という理由で恋愛や結婚をあきらめたり、「一人の時間を大切にしたいから」という理由で恋愛を敬遠したりといった若者が増えている一方で、恋愛に関心を持ち、好きな相手と強い絆を築きたいと願う人たちも多いことは、少子高齢化に対する対策を講じようとする日本政府による調査からも明らかになっている。

このような時代、社会変化の中での本研究の意義とは別に、日本的コミュニケーションの学問領域の確立、またその基盤の形成も本研究を取り巻く背景として重要な意味を持っている。100年以上にわたる独立した研究領域としてのコミュニケーション学の歴史を持つ欧米とは異なり、日本でコミュニケーション学が研究されるようになり、学会が設立され、大学で学部が新設されるようになってまだ日が浅い。「コミュニケーション」という名を冠する学部や領域が増してはいるものの、中身はグローバル社会で通じる外国語運用能力や、効果的なプレゼンテーションに向けたメッセージ発信に特化した学習内容など、いまだにコミュニケーションが表面的にとらえられ方をしていることは否定できない。この歴史的な浅さに加えて、この領域の研究では欧米の研究者主導の理論、概念、研究法がいまだに使われている。自己観やさまざまな社会行動を巡る存在論や価値観などといった文化の深部が異なるとされる日本で、いつまでも欧米で作られ、検証されてきた理論に依拠して日本人の社会行動を論じるには学問的限界があることはもちろん、今後日本文化での特徴を日本文化に根差した概念を使って説明し、さらにそれを世界の研究者に説明することは、グローバル社会における日本のコミュニケーション学界の責任とも言える。

これらの背景で行われ、またあえて日本語で執筆された本論文には、今後の日本でのコミュニケーション学の発展に寄与できる結果を示すことが期待される。

【研究の概要】

本論文は次の 7 章(156 ページ+引用文献リスト、インタビューデータサンプル等)で構成されている。

- 第1章 序論(現代社会でのコミュニケーション学の重要性・テーマ設定など)
- 第2章 「恋愛」にまつわる先行研究概観
- 第3章 本研究の視点
- 第4章 一次調査
- 第5章 二次調査
- 第6章 総合考察
- 第7章 結論

友池梨紗は恋愛、特に日本人の男女の恋愛に対する認識や行動について、これまで日本ではコミュニケーション学の視点からほとんど研究が行われてこなかったこと、またその他の状況での研究も欧米、特に米国の研究者によって提唱、検証されてきた理論や概念、また研究法が文化的背景を異とする日本にあてはめられていることを批判的に議論することから本論文を始めている。しかし、理論的根拠がないところから研究を行うことは困難であることから、そのまま適用することはできないことを承知のうえで「あえて」西洋理論を適用することを試み、それらの理論では説明できない、また逸脱した部分に焦点を絞ることによって「日本的理論」を築くことへの一歩を踏み出せると議論している(第1章)。

恋愛にまつわるコミュニケーション研究はこれまで日本の学界ではほとんど見られなかった、とは言うものの、古くは源氏物語などの文学をはじめ、社会学、心理学の領域ではある程度話題にされてきた課題ではある。「恋愛」という言葉そのものが比較的新しく作られ、使われるようになったこと、その言葉に込められる意味合いは今でも時代の変遷に伴って変化していること、明治以降男女間の恋愛と結婚に関する制度や慣習が、西洋をモデルとしながらも日本ならではの特色を混在させてきたこと、そして、見合い結婚がほとんどなくなった現代の日本で多くの男女がいかに恋愛に対して複雑化した認識、態度を持ち、それらに伴った恋愛行動も多様化しているかを説明している(第2章)。周囲の人たちの世話に任せておけば「何とかあった」時代は終わり、本人たちがきわめて広範囲にわたる選択肢の中から適切な手段を選んで行動しない限り、恋愛もままならない時代となっていることが論文中明らかにされている。そのような時代的背景での日本人男女の恋愛行動を、コミュニケーション学の視点から研究することには大きな意義があることを友池は示している。

前章で友池が明らかにしたことの中に、「告白」という行動と「付き合う」という考え方の日本的独自性を掲げることができる。周囲と違った行動をして必要以上に目立ったり、波風を起こして「出る杭」となったり、先が予測できずに次から次へと起こる新しい事態に対処しなくてはいけないという不安を未然に防ぎたいという気持ちから、多くの日本人が「型」を好むという文化的傾向が恋愛の状況にも見られることを友池は明確にしている。このことはこれまで Hofstede が 1980 年初頭に行った大規模な労働観に関する国際比較で、予期しないことが起こることを避け、仕事上のコミュニケーションでも日本人の「不明瞭さへの忍耐」の低さが目立つ、という結果と合致している。対人認識行動の成果や産物としての恋愛の過程でどのように日本人男女がコミュニケーション行動をするのか、という疑問に焦点を当て、「現代の日本人男女はどのようにして交際相手と出会い、『付き合う関係』を構築するのか」という問いに解を構築することを今回の研究の目的として示している(第3章)。

この問いに対する解を構築するために、友池は 15 名の男女に半構造式インタビューを行い、平均 1 時間以上の対話を通して、相手と知り合ったきっかけ、会ったときの話の内容や印象、恋愛感情を抱き始めたきっかけ・理由、「付き合う」関係に変わった瞬間のコミュニケーション(「告白」の有無)、付き合う前後でのコミュニケーションの変化、それに身体接触に関して質問した。インタビュー調査で収集した回答を逐語録にし、それを医療従事者と特に精神疾患を持つ患者とのやり取りの分析を念頭に始められた SCAT(Steps for Coding and Theorization)を使って分析した結果、どのようにして出会ったかがその後のコミュニケーションの特徴に大きく影響しているということが分かった。自発的に相手と出会ったのか、第三者を通してか、などによって友池は出会いの型を自然型、偶発型、グループ交際型、アプリなどを利用したマッチング型、仲介依頼型に分類した(第4章)。

この分析によって、日本人カップルが出会った方法によってその後の関係構築に違いがみられることは分かったものの、何がきっかけで、そしてそのきっかけを巡って当事者たちが自分たちの関係にどのような意味づけをするのか、ということが新たな疑問として生じたので、二次調査では

「ターニングポイント」とシンボル相互作用理論(Symbolic Interactionism)に基づいた新たな調査を行った。対象者は一次調査とは別の10名の男女で、一次調査と同様に半構造化インタビューを実施した。その結果、Baxter and Bullisによるターニングポイント理論で提唱されていたターニングポイントに加えて、今日の日本社会での人間関係の特徴を反映すると思われるいくつかの新たなターニングポイントへの認識とその実践も明らかになったが、その中でも「告白／関係の確認」が「付き合う関係」構築過程で重要であることが示された(第5章)。

二つの独立したインタビュー調査とその結果の分析を経て、友池は日本人の男女が出会って恋愛関係を構築、持続、発展するプロセスを説明するには、これまでに提唱されてきた欧米理論によって明らかにできることも多いと論じている。しかし、その一方で「縁」、「成り行き」、周囲との関係」などにも配慮して恋愛関係を築こうとする日本人ならではのコミュニケーション行動と、それらに対して置かれている価値の存在も明らかにすることができた。また、欧米で見られる独立自己観に対して、相互協調的自己観が一般的と言われる日本の特徴として、「間柄」や「気」への意識の強さも日本人の恋愛に対する認識に強く影響していると思われると結論付けた。また、日本独特とも言われる「付き合う」という言葉、考え方を男女双方が協働してその意味合いを構築し、共有しようとする傾向、その大きなきっかけ、さらには儀式としての「告白」への意識が強いという示唆も友池は導き出した(第6章)。

【評価】

友池梨紗は本学文学部外国語学科英語専攻に籍を置いていた学部時代から一貫して恋愛研究に強い関心を抱き、修士論文でも「日本人の恋愛観 -『恋愛したくても出来ない』日本人-」(2018)と題した日本人若者の恋愛コミュニケーションについての研究を行った。その研究成果の一つとして、コミュニケーション学の領域の垣根を超えて相当量の文献を読み込み、恋愛に関する国内外の先行研究に精通することができている。このことが本論文でもその効果を発揮し、理論的背景を明確にし、そしてコミュニケーション学という人間だけが使うことができるシンボル活動の「産物」としての恋愛研究の精度を高めることができた、という点で大きな強みとなっている。また、数少ない恋愛の社会学研究者を他大学に訪ねたり、セミナーに参加したり、また結婚支援を業務とする企業で関係者と交流する機会を作ったりと、文献を読むことだけでは取得し得ない情報の収集に熱心だったことも特記すべき「背景」であり、研究者としての信ぴょう性を高めることに貢献している。

恋愛研究に対する著者の強い関心は、本論文で展開された先行研究調査が単なる文献のまとめではなく、これまでにコミュニケーション学の領域外で行われてきた研究によって明らかにされたことを友池自身の知識へと昇華させ、自らの洗練された言葉で展開できていることに表されている。研究者としての真摯な態度はインタビュー調査にも余すところなく表れている。場合によってはきわめて個人的な経験をまったくの他人に暴露することがためられたことも容易に想像できるが、今回の研究のために参加、協力してくれたインタビューの対象者が恋愛感情や個人的な経験を率直に吐露してくれたのは、友池梨紗の研究者、またそれ以前に「信頼できる人」という信

びょう性に基づくものであったと思われる。

総計 30 時間を超えるインタビューの結果を分類、分析する作業も研究者の忍耐と冷静さを問う、質的研究ならではの挑戦と言える。インタビューで回答者が表してくれた恋愛の経験と、それらにまつわる認識や印象という貴重なデータから少しでも多くのことを読み取ろうとする真摯な態度も本研究の信頼度に大きく役立っている。今後、この種の質的研究で得た結果を科学的に検証するために、量的な研究方法やデータ収集の手法を習得することなどが研究者としてのさらなる成長のためには求められる。今回の論文で友池が示したインタビュー結果の緻密で忍耐力を要する分析を見る限り、多様な研究方法を駆使して、得られたデータを無駄にすることなく、一つでも多くのことを読み取ろうとする態度が示されており、研究者として今後さらに大きく成長できることは確実であると言える。

最後に、日本人のコミュニケーションの日本の研究という、日本のコミュニケーション学界で長年にわたって議論、追求されてきている課題は、一人の研究者が一度の研究によって成し遂げられるものでないことは論を待たない。しかし、今後ますますグローバル化、少子化が進むと思われる日本という文化での人々の社会实践としてのコミュニケーションを、欧米の視点ではなく、日本の歴史、伝統、社会通念などを十分に取り入れて理論化することは、これまでも増して急務である。そのような中で友池が今回の博士論文を執筆したことは、日本人のコミュニケーションの日本の研究への一歩としてその足跡を残すことが期待できる。独立した研究者として第一歩を踏み出せる証として、今回の博士論文は高く評価することができる。

以上、友池梨紗の論文『恋愛コミュニケーションプロセスに関する日本の研究』－ 現代の日本人男女はどのようにして交際相手と出会い、『付き合い関係』を構築するのか－』は、文学研究科においてコミュニケーション学専修の博士号を授与するにあたって、その基準を十分に満たしていると判断する。

主査 宮原 哲

副査 オルソン、ドウエン

副査 清宮 徹

2021 年 2 月 20 日